

8月24日(木)、本事業はじめての研究授業・授業研究と、運営指導委員の岡山大学教師教育開発センター教授 高旗浩志氏を招いての校内研修会を開催しました。当日は、松江地区国文学会との共催としたことで、外部からも多数の参加者がありました。以下、内容を要約掲載します。



1 研究授業及び授業研究

(1) 授業者自評

授業を実施したのは担任をしているクラス。学び合い、助け合いができる、合い(愛)の溢れるクラスにしたいと思って学級経営をおこなっている。例えば、わからないことを気軽に聞ける雰囲気をつくってきたい。その成果もあり、クラス内のコミュニケーションが取れてきている。そこで、少しずつ学習に協同性も導入している。前回ジグソーをしたが、比較的うまくいった。全員が家庭学習にきちんと取り組んでくれた。ジグソー活動の特性からも一人一人が責任を持って課題に取り組み、学ぶことができています。ジグソーは、他者の知恵がないと大問にたどりつけないので、協力してみんなで学ぶことの楽しさを味わうことができる。今回の教材は古典「伊勢物語」であった。単元の1・2時間目は単語、文法訳等の基本を押さえた。3時間目の本時は予め問いをこちらが設定した。今後は生徒から出てきた疑問を課題にして向かわせるようにしたい。疑問を持つ力も生まれつつある。今回は、総じてみんなで協力してできた感はある。

(2) 研究協議<ワークショップ>で各グループから出た意見(抜粋)

- Aグループ シンクシートによって思考が活性化されていた。
- Bグループ 協同学習をするうえでの授業の空気づくりがクラスでできていた。
- Cグループ 生徒の気づきをもたらず授業設計が必要。中心課題をいつも意識させることが大切。
- Dグループ 生徒が活発に学習に向かい、方向性を持って考えようとしていた。
- Eグループ 生徒が授業者を信頼していることが伝わった。
- Fグループ 安心感のあるクラスの風土が醸成されていると感じた。
- Gグループ 協同学習における教員の立ち位置や役割はどうあるべきか考える契機となった。

(3) 全体の講評(高旗先生) ~「学校は新しい自分に出会うところ」~

- ・授業の流れ(学び時計)を示していることがよかった。授業の見通しを持たせることは大事である。
- ・授業の目標(ねらい)として「認知的目標」と「情意的目標」が示されていたことはよかった。
- ・家庭学習と本時のつながりが明確であった。家庭学習は本来仕込みの場ではなく、学習の舞台(本番)である。授業(教室)が楽屋で、家庭学習への手がかりをつくる場であれば生徒は主体的に学習する。
- ・中心課題をしっかりと見せてから枝問を展開することが肝要。謎解きにならないよう注意する必要がある。
- ・ノートやプリントは思考のプロセスが見えるようにすることが大切。自由度のあるワークシートがよい。
- ・協同学習において、机間観察は、時間管理と生徒観察に徹する姿勢が重要。下手に指導したり、コントロールしないのがよい。生徒のつぶやきから授業のタネを拾うくらいのつもりがよい。下手にタイマーで活動時間を区切らず、生徒に時間管理の判断をさせているのはよかった。
- ・グループ分けをスムーズにする工夫として、あらかじめ指示されていることがよかった。
- ・学習指導案の目標や教材観に、必ず学習指導要領とのつながりを示すことが肝要だが、今回それがあった。迷ったら学習指導要領に戻る姿勢をもつ。抽象度の高い言葉を生徒の実態に落とし込む力も必要。
- ・ジグソーの有効性からも問いは構造的に構成することが大切である。
- ・授業の導入をコンパクトにすることが大切。指示は多く出さない。「今から3つ指示を出します」というくらいで、簡潔明瞭にわかりやすく指示を入れる。導入の機能は全員をまな板に乗せることである。

2 講話

「主体的・対話的で深い学びをめざして ー高校における質の高い学力を育む協同学習の考え方ー」

講師 岡山大学教師教育開発センター教授 高旗浩志 氏

講話では主に次の7点についてお話がありました。

1) 学習する集団づくりとは、支持的風土をつくり、課題解決型の学習集団を育成すること

「しんどいけど取り組まなきゃ」と思える子供を育てることが大切。一人で思い続けることはしんどい。だからこそ、集団に潜んでいる教育力にはたらきかける。それは、高め合う（時には厳しい追及を含む）ことができる集団づくりということである。協同学習は「グループ活動をさせましょう」ということではない。

2) 協同、共同、協働の違いから・・・

- ・共同 → ジョイントするということ。
- ・協働 → 分野が異なる専門家が、それぞれが自立しているなかで協働し、新しい価値を生み出すこと。
- ・協同 → コーポレーション。それは、支え合う、助け合う、高め合うこと。

対立や葛藤を経て学び合いに発展するが、簡単ではない。学び合いでは、いきなり支え合ったり高め合ったりにはならない。まずは「きしみあい」から始まる。

また、教員が単元のまとまりで授業を構成できるかもポイントとなる。どんな知識・技能が必要なのかを見極め、そうしたことを入れ込むことも重要である。AL型の授業は単元の2割程度と思ってよい。

3) 教室に支持的風土を醸成していく

あらゆるチャンネルを使って、支え合う、助け合う、補い合う雰囲気醸成することが大切である。防衛的風土は、例えば教員が「この問題わかる人？」と、問いかけることから生まれていく。生徒は、わからなくて困っている自分をさらけ出さないようにする。防衛的になる時に、隣と話をすればその姿勢が薄まる。つまり、支持的になっていく。

大学入試の存在は無視できないが、どんな時も『学習指導要領』を意識しながら授業を変えることが大事。「入試に対応できるのか、効果が上がるのか」と思うことは当然あるが、これは、良心的な不安である。まずは、教員同士で、いっぱい不安や疑問を吐き出す開き合いが必要である。

4) 「教授」から「学習」に転換する

意欲のある学習者には、手間がかからない。だからこそ、教材研究に時間をかけることが大切。進路が遅れがちな生徒への眼差しを変えることも大切。どう導入するかで意欲は変わってくる。個々の学び方の特性が理解できているか、苦手な子供に劣等感を持たせる授業になっていないか検証することが大切である。学習規律の確保は大事なことではあるが、一方で伸びやかに学ばせること、学びに解き放つことが重要である。学習規律が儀式になっていないか振り返って考えてみる必要がある。学びが薄くなっていることがある。

5) 教員の生の声から・・・

先生方から、「課題に対して動こうとしない」「無為に時間を過ごしている」と言ったことが聞かれることがある。なぜそうなるかを考えていない。生徒は、学習は言われたことをするものだとして認識している。教員が穴埋め式のプリントで丁寧に対応しようとしていることがよくある。定期試験対応ということはわかるが、一方でそつなくこなすためのツールになっていないか。

また、グループ学習では、何のために話し合うのかわからないまま話し合うことがある。話し合う必然性を感じていないこともある。また、活動がはじまってから軌道修正やヒントを与える説明を継ぎたしてしまいがちである。自ら学ぶ主体性を育てるには、説明はシンプルにしてあとは生徒に任せることが大切である。

6) わかった振りをさせない授業への転換

学びとはわからないからはじまる。学校の学びは、わからないことを恥ずかしいことと子供を追い込んでいることがある。安心して「わからない」と言える人間関係をつくっていくこと大事である。

7) どんなふうにはわからないかが説明できることが大切

授業では、解説を畳み掛けることがある。しかし、腑に落ちていないことが多い。程よい不親切な解説くらいがよい。生煮えの言葉を中途半端に言わせることで、自己内対話が生まれ、言葉をつむぐようになる。